まちのミュージアム -情報の受信・発信機能による地域活性化提案-

七間町の歴史、それは静岡の喜怒哀楽の歴史であった。
様々な文化とふれあいながら、笑い、泣き、楽しみ、感動するまち。

それらを支えた人々によって、日常の博物館が形成される。

museum
博物館または美術館

博物館[はくぶつ-かん]
歴史・芸術・民俗・産業・自然科学などに関する資料を収集・展示して
一般公衆の利用に供する施設

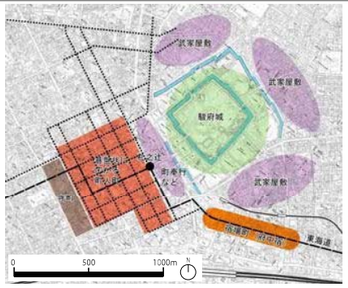
美術館[びじゅつ-かん]
美術品を収集・保管・展示し, 一般の展覧・研究に資する施設

地域活性化へのストーリー

インターネットが普及した今日、家に居ながらにして商品を購入する事が非常に容易になった。
オンラインストアでは日用品から書籍、家電、食品に至るまであらゆる商品を扱っており、インターネットオークションサービスでは個人間で安いものを手に入れることが、ファッションサイトでは数多くある商品をインターネット上で吟味することが出来るようになった。
さらには、日常的に持ち運び使用する携帯電話もパソコンに近づいており、距離という概念が消失したボーダーレス社会となっている。
それにより外出機会の減少、市街地の衰退が顕著化しており、外に出掛ける価値に見合った機能・空間の必要性が求められている。そのためには、その地域、そのまちの付加価値の上昇、利用回数の増加、滞在時間の増長を図ることが重要である。
そこで、私たちは「まちの要素の集約」を行うことで、「まちの魅力の向上」と「まちを知るプロセスの形成」を提案し、地域の活性化に寄与する。

そこにしかないものの創出
外出機会の減少
ボーダーレス社会
▶
まちを知る現在のまちの魅力向上
▶
情報の享受
まちに点在するモノやコトの集積場
まちのミュージアム
▶
来街者数の増加
滞在時間の延長上
▶
地域活性化

○七間町のこれまで、これから



静岡市中心部の江戸時代の構成図

○駿府城下町と町人のまち
現在のＪＲ静岡駅西口を中心として駿府城に付随する城下町が成立し、現在の七間町付近には町人地が碁盤状の街路とともにつくられた。その名残として、七間町や呉服町といった当時からの名称がいまも存続し、通りが中心の町構成であったためにそれらの名を取った商店街がＬ字状に連なり、商店郡を形成している

大正時代の通りの様子

○静岡市における文化活動の中心
江戸時代の七座の設置によって市民が寄りやすい土壌が七間町に生まれ、明治になって大衆演劇や演芸が注目されるようになると、小屋ができるようになった。
明治期になると、静岡で初の映画館がこの地につくられ、昭和の映画ブームによって映画館街が誕生した。
このように、七間町はどの時代も静岡の文化発祥のちであった。

「変わりゆく時代に対応する機能」とは何か?

人口の増加とモータリゼーションの拡大によって市街地が拡大しヒトもモノも拡散してしまった中で、今後さらにスピード化された社会を迎える。
その中で、静岡市中心市街地としての役割を再定義すると、人々の活動の中心点としてまずまちの様々な要素をこの場所に集約させる必要がある。そのためにはまず、人や建物、商品といった集約に時間の要するハード要素に先駆けて、知恵や教養、意見といったソフト要素を集約させる必要がある。
つまり、まちを構成する多様な「情報」をこの場に集めることこそが、静岡市街地再生の第一歩となる。

七間町のこれからは・・・

これまで商業・文化など市民活動の中心地であった七間町は、情報集約の拠点として最適な環境であり、また静岡市中心市街地西端のフリンジとして市民の滞留拠点でもある。
そこで、七間町を中心市街地の「交通結節点」として、また周囲から多様な情報がしみ出してくる「空白地帯」として定義し、交通機能の再編と空間の提案を行う。

○現状分析と整備方針

交通環境・動線

1. 現状と課題

○自動車環境
・国道３６２号線の交通量が多く、住宅地周辺まで自動車が入り込んでくる。
・近隣周辺部から流入する交通需要に対応するために、３６２号線沿線には大規模駐車場が、内部には空間地を埋める形で小・中規模駐車場が整備されており、対象敷地全体に虫食い状に散在している。

○自転車環境
・自転車交通量は比較的多いが、七間町通り沿いに点在する形でしか駐輪場が整備されていないため、対象敷地全体を通して歩道部分に無造作に放置されている自転車が目立っている。

○歩行者環境
・当地区とＪＲ静岡駅や静岡鉄道新静岡駅を結ぶ主要通りである七間町通りは、広幅員の車道・歩道が整備されており沿道に商業施設が集中していることで駐輪場の利用率も悪いが、自動車の通過交通が多く歩行者や自転車と動線が重なり危険であると同時に、市街地全体の回遊性を向上させるための主要歩行者軸としての機能を十分に果たしていない。
また、東隣りには緑道と公園を兼ねた青葉通りも存在しており、歩行者軸としての役割が曖昧となっている。

まちの要素の集約と分散

2. 整備方針

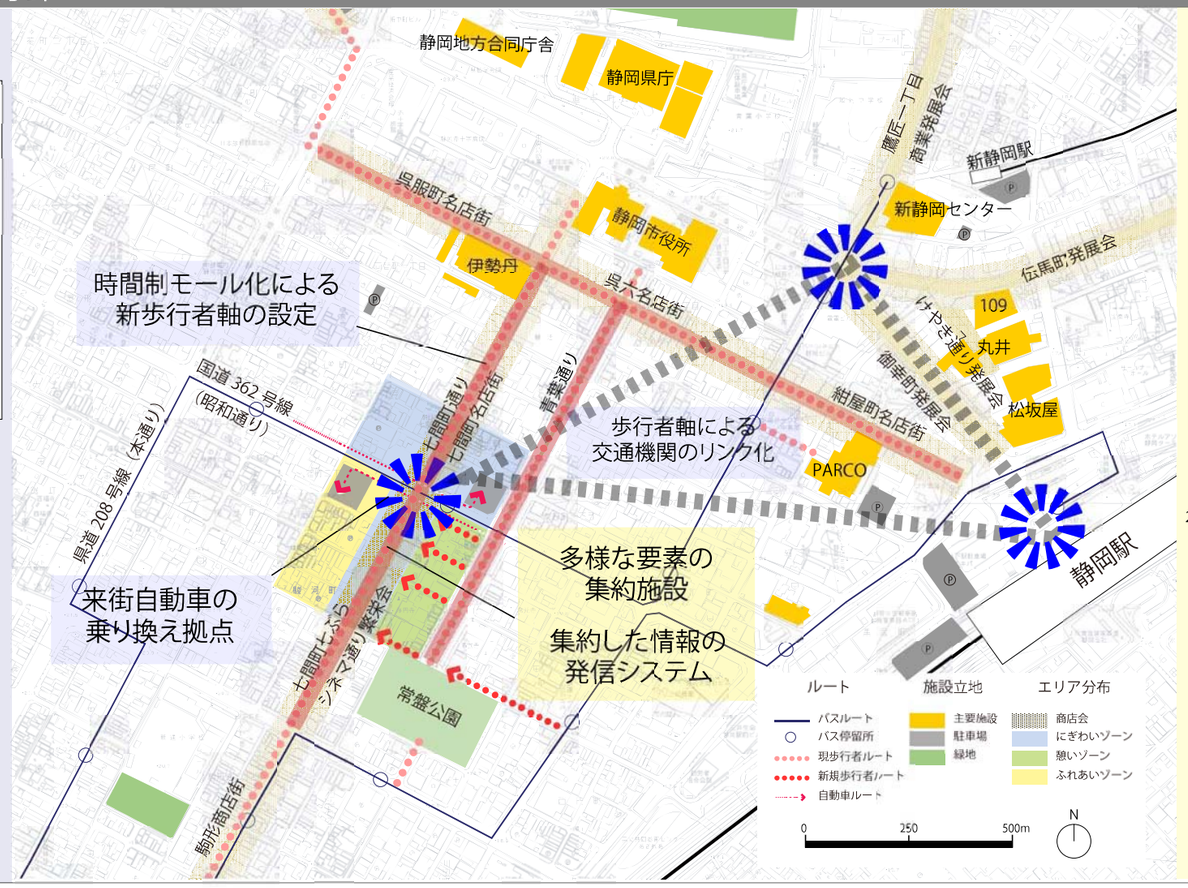
「交通結節点」

・七間町を静岡市中心市街地における西端の出入口と位置付け、国道３６２号線沿いに大型駐車場を新設して、自動車から歩行への乗り換え拠点とする。

・対象敷地内の自動車交通を減少させるため、対角線上に住民のためのフリンジ駐車場を設けて共同駐車場とする。同時に、荷降ろしのための空間としても利用する。

・小規模な住宅や商店が混在する地域には、背割道路をつなぐ裏路地を新設し、歩行者回遊性を向上させる。

・現行のバスルートを変更することで、七間町通りにおいて時間制のモール化を可能とし、国道方向の自動車軸と七間町通り・青葉通り方向の歩行者軸を分離する。また、駐車場と公共交通の乗り換え拠点を集約させることで、中心市街地全体の歩行者回遊性を向上させる。



空間機能・街並み

1. 現状と課題

○住居・商業機能
国道３６２号線と七間町通りの交差点には１３階建の大規模マンションが一棟立地しており地域の核となっている。七間町通り以西には小規模住宅が密集しており、独特の雰囲気を作り出しているが、商業建物と混在立地しているものが多く、適正な用途誘導がされていない。
七間町通りには低層部に連続的に店舗が立地し、対象範囲外にも商店街が連なるが、近年では駅周辺の大規模施設立地によって利用客は減少している。

○映画館
七間町のシンボルとして地域の文化を長年支えてきた４つの映画館が閉館することによって、地域としての核機能が失われ、急速な衰退が予想される。しかし、跡地がそのまま空間地となれば町への影響は非常に大きく、建物の有効利用が望まれる。

○街並み
・七間町通り沿いは中高層ビルが連なっているが、スカイラインは統一されていない。一部を除いて対象敷地全体が住商混在のため、壁面や看板など町のファサード構成がバラバラとなっている。

まちの要素の集約と分散

2. 整備方針

「空白地帯」

・映画館跡地は、周辺の娯楽施設とともにコンバージョンを実施し建物の再利用を図る。一部は、骨格のみを残した広場とし、文化活動を行うオープンスペースとする。

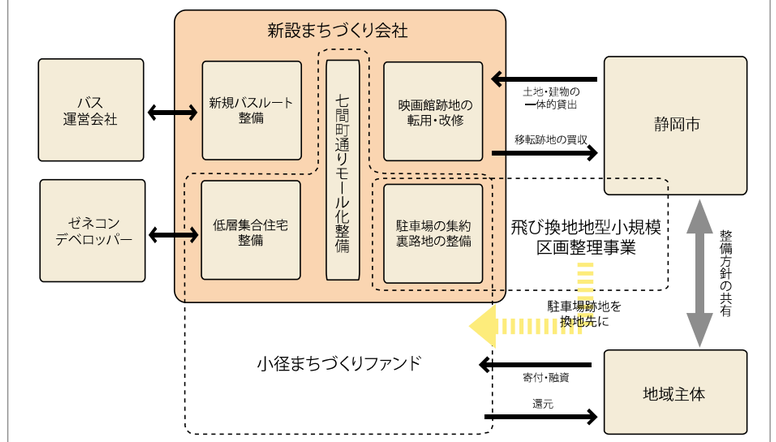
・コンバージョン後は、すべてが中心市街地の商店街の品物でつくられたショールーム「まちの家」と、商店街の食堂やレストランが集まったフードコート「まちの食堂」をつくり、七間町名店街をはじめとした各商店街の情報発信拠点とする。

・国道沿いに集約した駐車場跡地を利用して公共広場を設け、まちの食品店がものを売ったり、アーティストやパフォーマーが芸を披露したりする「屋台村」をつくる。

・集約した情報を周辺部に効率的に分散させるため、放送として情報を流す「七間町ラジオ」や、情報掲示板としての役割を持つ「まちのスクリーン」をつくる。

○実現化方策

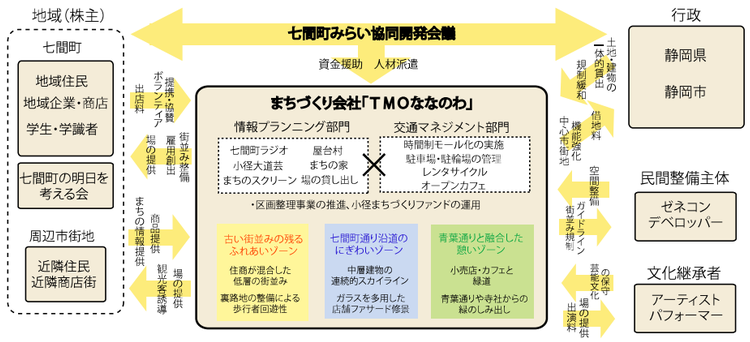
○飛び換地型小規模区画整理と小径まちづくりファンドによる持続的整備



○飛び地型小規模区画整理事業
自動車から歩行への乗り換えを促進する駐車場や対象敷地内の歩行者回遊性を高める裏路地などを効率的に新設するために、整備予定地周辺の築年数の古い建物や狭小敷地の建物などを選定して既存駐車場の移転跡地に集約する「飛び地型小規模区画整理事業」を実施し、区画の再編を行う。施設の重要度や事業規模を考慮し、集約駐車場→フリンジ駐車場→裏路地→駐輪場の順に区画整理を連鎖的に展開していくことで、スムーズな事業進展を図る。

○小径まちづくりファンド
行政や機構からの補助、地域住民や商店会からの寄付などを財源として、「小径まちづくりファンド」を設立する。後述の新規設立団体「ＴＭＯななのわ」がその運用を担い、ストリートファニチャーやイメージバンプ、モール化時の車止め、花壇といった当地区の歩行者回遊性向上につながるインフラ整備を行う。また、住居機能の向上を図るため、換地先への低層集合住宅の誘致も行う。
場の貸し出しや各種イベント実施などで得られた利益は、パーフォーマー出演料や地域への還元等にあてる。

○「ＴＭＯななのわ」による相互連携のエリアマネジメント

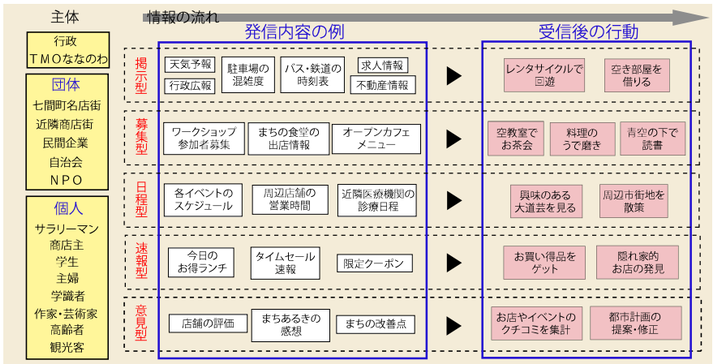


○まちづくり意向共有の場
静岡市中心市街地の中でも七間町地区を重点開発地域として整備していくために、七間町やその周辺市街地に関わる様々な人々と行政とが一体となったまちづくりを推進するための意識共有の場「七間町みらい協同開発会議」を設置し、上位計画との整合性を図りながらまちづくりの方向性を共有する。

○まちづくり会社の新設
住民・企業・商店などの地域主体と静岡市が共同で資金援助や人材派遣を行い、七間町のまちづくりを専門的に実施するまちづくり会社「ＴＭＯななのわ」を設立する。ななのわは、情報プランニング部門と交通マネジメント部門に分けれており、前者は七間町を舞台とした情報享受や賑わいの創出、後者は七間町周辺のフリンジとした歩行へのスムーズな乗り換え促進のための交通管理をそれぞれ行う。

○ななのわが中心の相互連携
各事業の実施や街並み・用途誘導のためのガイドライン策定などによって七間町に関連する各主体間との相互連携を促進し、まちづくりの旗振り役としての機能を担う。地域と行政だけでなく、これまであまり関わりのなかった主体間の意向調整機関として、ゾーンごとの特性に合わせた街並みの整備を主導する。

○七間町ラジオとまちのスクリーンによるリアルタイムの情報享受



○発信者と受信者の両約を担う
七間町ラジオやまちのスクリーンを使って、七間町やその周辺地区の様々な情報を発信を集約しリアルタイムで発信していく。投稿方法も、口頭や紙面での伝達のほか、携帯電話などのモバイル端末によって即時性のある情報が集まり、受信者はその場所・その時間にしかできない行動を起こすことができる。
有益な情報を得た主体は、そのまま七間町を回遊したり、公共交通を利用して駅方面へ繰り出し、そこで別の情報を得ると今度は発信者となって情報を投稿するようになる。

○七間町のブランド価値向上
七間町地域外の主体向けの情報だけではなく、地域住民に対する情報も同時に発信していく。例えば、近隣公民館の空室情報を得た主婦は、友人とともにお茶会を開き、また高齢者は近隣医療機関の診療日程を得ることで、安心した日常を送る。
住民向けの情報を充実させることで、商業地としてだけではなく住宅地としても充実しているという情報が広がり、しいては七間町全体のブランド価値の向上につながる。